

# 辛亥革命の今日的な意味は何か

今日10月10日は、辛亥革命の発端となった武昌（現在は武漢市に統合）での蜂起（1911年）から百周年の記念日である。中華民国の建国に罪を開いた辛亥革命はまさに、中国近代史の大きな分水嶺となった出来事であった。

辛亥革命の結果、翌12年の元日には、米国から帰国した孫文が中華民国臨時大總統就任を南京で宣言し、270余年の歴史を誇った清朝は翌2月に崩壊した。だが、孫文は北洋軍閥を率いてきた清朝の軍事指導者、袁世凱にその地位を奪われ、以後、中国は軍閥割拠の混乱を余儀なくされる。

孫文は、「革命未だ成らず」との有名な遺囑を残して、25年3月に没するのだが、結局は当時のソ連とコミンテルンに頼るといって、「連ソ容共」政策に向かい、中国を革命と内戦の時代に招き入れてしまった。その間には、19年の日本の21力条要求に抵抗する五四運動や2度にわたる国共合作とその破綻によって、中国共産党の毛沢東と中国国民党の蒋介石という2人のリーダーが歴史の前面に登場することに、49年の中華人民

共和国成立以後も、中国国民党と中国共産党との対立と違和は存在し続けて、今日に至っている。

号「中山」は日本の表札から

孫文については多くのことが語り尽くされながら、その実像については意外に知られていない。

例えば、孫文の号は孫中山で、中国にも台湾にも「中山公園」や「中山路」など「中山」を冠した場所や建物は数多くあるが、孫文が東京・日比谷の宿屋に名を秘して泊まった際、通りがかりに見た表札の「中山」を使ったのがそのいわれであることや、広東省香山の客家（中華文化発祥の地、古代の中原などをルーツとし、後に戦乱を逃れて南に下った正統な漢民族）の出身であった孫文が客家語と広東語のどちらが得意であったかも一般には分かっていない。

晩年は著名な宋家の慶齡を夫人としたのだが、数多くの女性と関係があり、横浜には2人の日本人女性がいって子供もあったことなども、直木賞作家の西木正明氏が実にも丹念に調べ上げた本、『孫文の女』（文藝春秋）を出すまで、全く明らかにされていなかった。

## 正論



国際教養大学理事長・学長 中嶋 嶺雄

区のモンゴル族に対する弾圧や、漢族による満州族同化政策が、そのことを確弁に物語っている。

孫文の「三民主義」は、一方、蒋介石統治下で独裁体制を強いられてきた台湾の多くの民衆にとっても、80年代末の李登輝総統の出現によって、自由・民主・均富という「現代の三民主義」が実現するまでは、無関係なスローガンであった。実際、李登輝氏自身、辛亥革命や孫文については、全くといっていいほど語っていない。

中国と台湾の社会的現実と孫文の位置との大きな乖離にもかかわらず、孫文がなお絶対的な存在として扱われているのは、政治的に利用するためにほかならない。

私自身、このことに関して貴重な経験をしている。あれは、66年11月12日に、北京の人民大会堂で「孫文生誕百周年記念大会」が開かれたときのことだった。

生誕百周年記念に見た政治利用 最近も、東京と長崎で、「孫文と梅屋庄吉」に関する展覧会が開かれていたが、孫文の革命には、日比谷松本樓の梅屋や九州の宮崎

酒天ら日本人が支援をしたというので、私たち日本代表団は最前列に席を与えられていた。ヒナ壇には周恩来首相や孫文夫人の宋慶齡国家副主席ら錚々たる要人が並んでいるのに、肝心の劉少奇国家主席と鄧小平総書記の姿がない。訝っている、劉、鄧の2人が舞台の右手から遅れて登壇した。しかし、全く拍手が沸き起こらない。私はその瞬間に、これが実権派打倒を掲げた文化大革命の現実なのだと思ったのだが、大会が始まると、孫文生誕百周年記念という本旨はそっちのけで、周恩来まで「毛主席万歳！ 万々歳！」を絶叫していた。それは孫文の政治利用以外の何物でもなかった。

台湾の総統選挙が来年1月に迫ってきただけに、中国との関係の密接化を求める国民党の馬英九総統は、再選を目指して、「国父」孫文の功績を大いに活用するであろう。民進党主席の蔡英文女史は「国父」との距離をあえて自立たせるであろう。この点にこそ、「中華民国百年」の今日的意味があるといえるのかもしれない。

(なかしま みねお)